『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と 『大智度論』との関連について

TRAN Thuy Khanh

1. はじめに

『坐禪三昧經』は、『大正藏』第十五卷の「經集部」の「禪經類」に属するものである。鳩摩羅什門下である僧叡の「関中出禪經序」¹⁾によれば、『坐禪三昧經』は、羅什が弘始 4 年に長安で訳出し、弘始 9 年に再校訂したもので、上巻及び下巻の前半に説く小乗禪觀・声聞禪の部分は、インドの七論師が説いていた禪の綱要であり、下巻の後半にある、菩薩の念仏三昧・不淨觀・慈三昧・因縁觀・念安那般那の五観法を説示する部分は、別の時期に撰び出したものであるとされる。池田英淳氏は『鳩摩羅什訳出の禪經典と廬山慧遠』²⁾の研究で、『坐禪三昧經』の編纂の基礎となったのは、『大智度論』であり、本經の下巻は、鳩摩羅什自身が述べたものであると推定されている。これを基にして、本論文では、菩薩の五観法はどの程度『大智度論』の影響を受けたのかという疑問から、菩薩の五観法と『大智度論』とを比較対照し、課題を解明したいと思う。

2. 『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との関連

『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との内容を比較対照すると、共通点と相違点を浮かび上がってくる。これを下表に示す。

『坐禪三昧經』における菩薩の五観法		『大智度論』
念 仏 三 昧	若し行者、仏道を求めて禪に入らば、先ず当に繫心して専ら十方三世諸仏の生身を念ずべし。(中略)菩薩はこの三昧を得て、無量劫の厚罪を除き薄からしめ、薄きは滅せしむ。(中略)これを菩薩の念仏三昧となす...	念仏三昧とは十方三世の諸仏を常に心眼をもって見ること前にあつて現ずるが如きを名づく。(中略)菩薩道にして、無量の仏土の中において、三世十方の諸仏を念ず。(中略)復次に、念仏三昧は、よく種々の煩惱及び先世の罪を除く。8)
	是の三昧を得已ってまさに仏の種々無量の功德、一切智、一切解、一切見、一切徳を念ずべし。(中略)。仏にかくの如き等の種々無量の功德あるを〔念ず〕...	仏の一切智、一切見、大慈大悲、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を念じ、仏の知りたまうところの如き、無量不可思議の諸の功德を念ず。これを念仏と名づく。9)
	また大誓を作す、過去一切の福・現在一切の福を尽く持して仏道を求め余報を用いずと。(中略)大悲心をもって我れまさに一切の衆生を拯済して、一切の仏法願わくは悉くこれを得んこと... 3)	仏道を求むる者は、初発心より願を作し、「願わくはわれ、仏と作って衆生を度脱し、一切の仏法を得。(中略)仏道を成じ、ないし無余涅槃に入らん」と本願に随って行ず。10)

『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との関連について (T. K. TRAN)(67)

	<p>先ず自ら身を観ず。骨・肉（中略）涕・唾の三十六物、九想不浄を専心に内観して外念せしめず。（中略）人が燭を執って雑穀の倉に入り、種々に豆麦黍粟を分別して識知せざることをなすが如し...</p>	<p>菩薩摩訶薩は、内身を観じ、足従り頂に至るまで、薄皮を周匝し、種々の不浄、身中に充満す。是の念を作さく、「身中に、髪、毛、（中略）略説すればすなわち、三十六、広説すればすなわち衆多なり。（中略）譬えば、（中略）明眼の人は、倉を開けば、すなわち、これは麻これ豆なりと知り、分別してことごとく知るが如し。</p>
不 浄 観	<p>また次に身の六分を観ず。堅を地分となし、湿を水分となし、熱を火分となし、動を風となし、孔を空分となし、知を識分となす。</p>	<p>不浄観とはいわゆる菩薩摩訶薩は、身を観ずること、草木瓦石の如きにして、異なることなし。この身は、外の四大、變じて飲食となり、内身に充満す。堅きものはこれ地、温かきもの湿いものはこれ水、熱するものはこれ火、動くものはこれ風なり。</p>
	<p>また屠牛を分つて六分と爲し、身首・四支各自ら処を異にするが如し。身に九孔ありて常に不浄を流し、革囊もて尿を盛る。常に是の観を作して外念せしめず。</p>	<p>譬えば、屠牛師、刀をもつて牛を殺し、分けて四分を作し、四分を作し已って、もしくは立ち、もしくは坐して、この四分を観ずるが如し。11)</p>
	<p>若し一心を得て意に厭患を生じ、この時まさに大慈大悲を發すべし。大功德をもつて衆生を拔置し前の三願を興す。</p>	
	<p>諸法実相は有常に非ず無常に非ず、浄に非ず不浄ざることを學求すべし。</p>	<p>諸の菩薩は諸初心より弘く大に誓願し（中略）大利智あつて諸法実相を求め.... 12)</p>
	<p>我が法の如きは、まさに実相を求むべし、云何んが身中の不浄を厭患して涅槃を取らん。（中略）不浄観を行じて婬欲を除劫し、広く衆生を化して欲患を離れしめ、不浄観のために厭没されず。</p>	<p>その時に菩薩はこの念を作さく、（中略）われ今この因縁和合して生ぜる自性なき不浄の法を取るべからず。疾かに涅槃に入らんと欲す」と。13)</p>
慈 三 昧	<p>また次にすでに不浄を観ずれば則ち生死を厭う。まさに浄門を觀じて心を三処に繫くべし。4)</p>	
	<p>菩薩道を行ずる者、若し瞋恚偏へに多ければ當に慈を行ずべし。東方の衆生を念じ、慈心清浄にして怨なく、慈心廣大無量にして、諸の衆生悉く目前に在るを見る。南西北方四維上下もまたまたかくの如し。（中略）慈は是れ心法にして心より出生す。先ず所親よりし、所親転憎して乃ち怨家に及ぶ。（中略）火の薪を焼いて盛なれば能く濕を然やすが如し。</p>	<p>比丘あり慈相応の心をもつて、恚なく、恨なく、怨なく、惱なく、廣大無量にして、善く慈心を修し、解を得て遍満す。東方世界の衆生も慈心にして解を得て遍満し、十方の世界の衆生の悲・喜・捨相応の心をもつてするもまたかくの如し。（中略）慈三昧もまたかくの如く、初めに慈願を生ずる時は、ただ諸の親族知識に及ぼし、慈心転た広くして、怨親同等、みな衆を得るを見る。譬えば火を鑽るには、先ず輕草、乾牛屎をもつてし、火勢転た大にして、よく大なる濕木をも焼くが如し。</p>
	<p>慈三昧に住し以て諸法実相を觀じ、清浄にして不壞不動なり。</p>	
	<p>若し一心を得ば、まさに發願して言うべし。我れ涅槃、実の清浄法をもつて、衆生を度脱し実の樂を得しめむ。</p>	<p>行者は是の慈無量心を學せんと欲する時、先ず願を作さく、「願わくは衆生をして種々の樂を受けしめん」と。</p>
因 縁 観	<p>この慈三昧は略説するに三種の縁あり。生縁・法縁・無縁なり。諸の未だ道を得ざる。是を生縁と名づけ、阿羅漢・辟支仏、これを法縁と名づけ、諸仏釈尊是を無縁と名くこれ略して慈三昧門を説く。5)</p>	<p>慈に三種あり、一には衆生縁、二には法縁、三には無縁なり。（中略）愛樂・愛憎及び中の三種の衆生は、正等にして異なることなし。十方五道の衆生の中に一慈心をもつてこれを見る。（中略）かくの如き慈心を衆生縁と名づけ、（中略）法縁を行ずとは、諸の漏尽の阿羅漢・辟支仏・諸仏、この諸の聖人は、吾我の相を破す。（中略）聖人はこれを破み、意隨つて樂を得せしむ。世俗の法のための故なり。名けて法縁となす。無縁とはこの慈はただ諸仏のみにある。（中略）仏は、この諸法実相の智慧をもつて、衆生をしてこれを得せしめたまう。これを無縁と名づく。14)</p>
	<p>一心に思惟すらく、生老病死は因縁より生ずと。（中略）行の因縁は無明なり。（中略）痴滅するが故に行滅すと。（中略）菩薩は十二因縁を觀じ、繫心して動ぜず外念せしめず。諸縁を外念せばこれを撰して還らしむ。（中略）菩薩もし心住するを得ば、常に十二分の空にして主あることなきを觀ずべし。</p>	<p>もし、一心に諸法実相を觀じて清浄なれば、すなわち無明尽く、無明尽くが故に行も尽き、ないし衆苦の和合の集、みな尽く。これ十二因縁の相なり。（中略）また次に、この十二因縁觀の中に法愛を断じて心著せず実相を知る。（中略）この十二因縁觀を觀じることを作す者は、即ち道場に坐して薩婆若を得るとなす...15) その時、菩薩は畢竟空に安住し、十二因縁のなかに、一切の色などの法の若しくは有、若しくは無などを見ず。16)</p>

(68)『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との関連について (T. K. TRAN)

因縁観	また更に思惟す、これ四種縁にして因縁・次第縁・縁縁・増上縁なり。五因縁となる、過去現在の阿羅漢の最後心を除いて、余の過去現在の心・心数法はこれ次第縁なり。縁縁・増上縁は一切法を縁とす。	一切の有為法は、みな四縁より生ず、いわゆる因縁、次第縁、縁縁、増上縁なり。因縁とは相應因、共生因、自種因、遍因、報因、この五因を名づけて因縁となす。また次に、一切の有為法をまた因縁と名く。次第縁とは、阿羅漢の過去現在最後の心・心数法を除いて諸余の過去現在の心・心数法は、よく次第を与う。これを次第縁と名づく。縁縁、増上縁とは、一切法なり。(中略)菩薩は般若波羅蜜を行じて、かくの如く四縁を觀じ、心に著する所なし。17)
	仏のいわく、眼の因、色の縁にて癡邊に邪憶念を生ずと。癡はこれ無明なり。このなか無明は何の所により住するや。もしくは眼によるや。もしくは色中なりや、識中なりや。(中略)この故に無明には内に非ず、外に非ず。(中略)虚空の不生・不滅・不有・不尽・本性清淨なるが如く、無明もまたかくの如し。6)	因縁生の故に実なし、經中に説くが如し。眼によって色を縁じて觸念を生じ、觸念は癡より生ず。觸念は眼中に在らず、色に在らず。(中略)この故に、癡の実相は究竟清淨にして、虚空の如く無生無滅なり。18)
念安那般那	若し菩薩、心に多思覺なれば常に安那波那を念ず。入時出時に一を数えてすなわち十に至り、一心を馳散せしめず。菩薩は此の門より一心を得、五蓋の欲行を除く。	菩薩摩訶薩は、身に循って觀じる時、一心に念じ、入息の時、入息を知り、出息の時、出息を知り、(中略)これをもつての故に安那波那、十六分を説き、もつて覺觀を防ぐ。19)
	菩薩は見道にまさに三種の忍、すなわち生忍・柔順法忍・無生法忍を行ずべし。	
	云何んが生忍なりや。一切衆生あるいは罵りあるいは打ちあるいは殺し、種々の惡事あるも、心動転せず、不瞋不恚にして、ただこれを忍ぶのみならず、(中略)心捨放せずば、この時漸やく諸法実相を解するを得る。	生忍は衆生のなかの忍と名づく。恒河沙劫などの如き衆生種々に惡心を加えれども瞋恚せず... 20) (中略)この時に菩薩はまさに諸法の実相を思惟すべし。かくの如く諸法の相を觀する時、罵者を見ず、割截者を見ず。21)
	云何んが柔順法忍なるや。菩薩既に生忍の功德無量を得て、この功德福報の無常なるを知る。この時無常を厭いて自ら常福を求め、また衆生のために常住の法を求む。一切諸法いわゆる色・無色法、(中略)上中下法において、その実相を求む。実相とは云何ん。有常にあらず無常にあらず(中略)。言説ことごとく滅し心行処断すること、涅槃の性の如し。この法は実相なり。	柔順法忍は深法のなかに於いて忍ず(中略)菩薩は一切智人と作らんと欲せば、まさに一切の法を推求して、その実相を知るべし。十四難の中において滯らず、礙らず。あれこれは心の重病なりと知って、よく出でよく忍ぶ、これを法忍と名づく... もし菩薩、一切法は、常にあらず、無常にあらず、(中略)この義は一切觀を捨てて、一切言語を滅し、諸の心行を離れ、本より已來不生不滅なること、涅槃の性の如し。一切諸法の相もまたかくの如し。これと諸法実相と名づく。22)
	云何んが無生法忍なるや。如上の実相法の中に智慧、信、[精]進増長し根利なる。是を無生法忍と名づく。(中略)無生法忍もまたかくの如し。いまだ菩薩の果を得ざる者、無生法忍を得ば、菩薩真行の果を得。これを菩薩道の果と名づく。この時般舟三昧を得、衆生中において大悲を得、般若波羅蜜に入る。その時諸仏すなわちその號を授け、不退転と名け不動處に到る。最後に肉身尽きて法身中に入り、よく種々の變化を作して一切衆生を度脱し、六度を具足し諸仏を供養し、仏国土を淨め衆生を教化し、十地の中に立ちて功德成満し、次第に阿耨多羅三藐三菩提を得。〔これを〕菩薩禪法中の初門となす。7)	もし菩薩は、よく一切法の不生不滅を觀ず。実相の智慧を信忍して、よく壞する〔者〕なく、よく動ずる者なし。これを無生法忍と名づく。無生法忍とは、即ちこれ阿鞞跋致地なり。また阿鞞跋致地に住すれば、世に常に果報を得、神通を失わず退せざるなり。もし菩薩この二法を得れば、諸法実相を得といえども、しこうしても大悲をもつて一切衆生を捨てず、(中略)また次に、般舟三昧はこれ菩薩位なり。この般舟三昧を得れば、悉く現在の十方諸仏を見たまつて、(中略)菩薩位とは、六波羅蜜を具足し、方便智を生じ、(中略)一切法の畢竟空を觀じ、心・心数法を縁すること断じて生ぜず、これを無生忍と名づく。23)

上表の示しように、『坐禪三昧經』で述べる菩薩の念仏三昧では、十方と三世の諸仏の生身を念ずれば、無量劫の罪が除かれるとあり、また仏道を求め、衆生を済度し、一切の仏法を得る三種の大願が説かれている。これらは、『大智度論』にも見られる。

不淨觀では、両經典が共通して六分身を屠牛に例え、また人が灯火を手でかざして倉に入り、豆・麦などの種々を分別し知ることに例えることがある。さらに、諸法実相を学び求め、厭患の心を生じ、涅槃に速く入ることは、両經典に共通している。しかし、『坐禪三昧經』に説く淨門觀と三大願を起こすことは、『大智度

『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法と『大智度論』との関連について (T. K. TRAN)(69)

論』では説かれていない。これは、菩薩の五觀法と『大智度論』との相違点であるといえる。

慈三昧では、菩薩道にある修行者は、十方の衆生を念じ、慈心を行うことを述べ、諸法実相觀、衆生の度脱發願を説いている。『坐禪三昧經』で説いている転憎、及び怨家の例えと三種縁は、『大智度論』にもみられる。

因縁觀では、十二因縁の生滅、および空を觀じることは、両經典に共通している。また、『坐禪三昧經』で説いている四縁は、『大智度論』に同じ用語用字と内容がある。とくに、『坐禪三昧經』の十二因縁の中で無明の実相を示しているのは、『大智度論』に基づいていることは明らかである。念安那般那では、『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法に三種忍の実践修行を述べている。その生忍、柔順法忍、無生法忍を示す内容は、『大智度論』に同じ用語と内容が見られる。例えば、『坐禪三昧』で用いている「得般舟三昧、不退転、具足六度」などは、『大智度論』も同じように用いている。

以上のように『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法と『大智度論』とには多くの点で共通している。

「用語用字」については、『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法と『大智度論』とでは、念仏三昧、不淨觀、慈三昧、十二因縁觀、安那般那、三十六物、九想、三種縁、四種縁、諸法実相、空、無生法忍、得般舟三昧、六度、不退転などが共通している。「比喩」については、人が灯火を手でかざして倉に入る例や、六分身・四分身を屠牛に例える例や、火が草を燃やす例が両者に共通している。「内容」については、『大智度論』の記述の仕方は、具体的で詳細であり、『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法は、要点を捉えた簡潔な記述となっており、両經典の内容に共通点が多い。「思想」については、『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法で説かれる大乘の旗印である「諸法実相」は、大乘仏教の思想の精髓を的確に受け止めている。菩薩道の中心的な実践修行は済度衆生、成就仏道、得一切仏法の誓願を立てることである。これらの思想は、『大智度論』の思想に影響を受けたものであると考えられる。

3. まとめ

以上、『坐禪三昧經』における菩薩の五觀法と『大智度論』とを比較対照してきた。菩薩の五觀法と『大智度論』とには、用語用字と比喩、その内容と思想に多くの共通点がある。用語用字・比喩・内容と思想に多くの共通点があるから、類似性

(70)『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との関連について (T. K. TRAN)

が非常に高いと考えることができる。

『大智度論』は、龍樹が『大品般若經』を注釈した書物であるとされるが、菩薩の五観法は『大智度論』から大乘仏教の思想の精髓を受けたのであろうと考えて間違いはないと思われる。

僧叡は「関中出禅経序」で、『坐禅三昧経』下巻の後半分に説く菩薩の五観法が、上巻及び下巻の前半分とは、別の時期に選出されたものであるとしているが、誰が著したものかは、確定していない。両書の共通点、および相違点を比較検討すると、菩薩の五観法は、鳩摩羅什が、菩薩道実践の初心者のために、『大智度論』に説く菩薩の修行法の要点を選び出し、撰述したものである可能性が非常に高いと考えられる。

『坐禅三昧経』における菩薩の五観法は、鳩摩羅什が『大智度論』に基づいて撰述したものである可能性が大であることが判明したが、他に影響を受けた経典はないか。あればどの経典で、どのような影響を受けているかという疑問が持たれる。これについては、今後解明したいと思う。

-
1) 『出三蔵記集』卷第九 (『大正蔵』 55・65 a - b)	2) 池田英淳「鳩摩羅什訳出の禅経典と廬山慧遠」(『大正大学学報』 26, 1937 年)
3) 『坐禅三昧経』 (『大正蔵』 15・281a-b)	4) 『坐禅三昧経』 (『大正蔵』 15・281b-c)
5) 『坐禅三昧経』 (『大正蔵』 15・282a)	6) 『坐禅三昧経』 (『大正蔵』 15・282b - 285a)
7) 『坐禅三昧経』 (『大正蔵』 15・285a - c)	8) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・108c - 109a)
9) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・219b - 221b)	10) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・191b)
11) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・403a - 404b)	12) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・196a)
13) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・218c)	14) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・209c)
15) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・100c)	16) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・623a)
17) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・296b - 297a)	18) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・622a)
19) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・404b)	20) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・106c)
21) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・672a)	22) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・170b, 190b)
23) 『大智度論』 (『大正蔵』 25・662b)	

〈キーワード〉『坐禅三昧経』, 『大智度論』, 五門禅, 五観法, 諸法実相

(愛知学院大学大学院博士課程)